東日本大震災・原子力災害ふくしま語り部派遣事業

東日本大震災・原子力災害の経験や教訓を伝える

東日本大震災・原子力災害ふくしま語り部

を無料で派遣します

東日本大震災及び原子力災害の発生から12年が経過し、全国で風化が進行する中、震災等の記憶と教訓を人々の心に刻むものとして、語り部の生の声による伝承がますます重要になっています。

本事業では、「東日本大震災・原子力災害ふくしま語り部」を全国に無料で派遣し、世界に類を見ない複合災害の経験や教訓、そこから立ち上がる福島の現状や魅力について思いを伝えます。

派遣先及び派遣する語り部

1 派遣地

各都道府県の防災イベント、防災研修等

2 派遣する語り部

東日本大震災・原子力災害ふくしま語り部ネットワーク会議登録団体等の語り部

申込みから開催までの流れ

1 申込みの受付

申込期限：原則希望月の３か月前の月の月末まで。
（例：12/13派遣希望の場合→締切9/30）

2 派遣の可否の連絡

申込書受付後、３週間以内に連絡します。

3 派遣者名等の派遣内容の連絡

開催日の１か月前までに連絡します。

4 防災イベント等主催者と電話･メール等での打合せ

開催に向けての準備等を進めます。

5 会場への派遣、開催

会場設営、必要機器等の準備を行ってください。

申込みに際しての注意事項

1. 派遣対象：自治体、学校、その他の団体が主催し、防災・減災意識を高めることを目的とした講座等とします。ただし、政治・宗教・営利を目的とする集会等は除きます。
2. 聴講者数：概ね20名以上が聴講する防災講座等に派遣します。ただし、これを下回る場合においても状況に応じて派遣します。
※必要機器等（プレゼンテーションソフトを使用できるパソコン、スクリーン、机、マイク及びマイクスタンド等）は申込者に準備していただきます。また、会場借上料などの必要経費は申込者の負担となります。
3. 講話後、アンケートの御協力をお願いいたします（主催者・聴講者）。

申込み・問合せ先

申込みは、福島県生涯学習課のホームページから、『東日本大震災・原子力災害ふくしま語り部震災講話受講申込書』をダウンロードして、必要事項を御記入の上、下記のアドレスまでお送りください。

東日本大震災・原子力災害ふくしま語り部ネットワーク会議事務局（福島県生涯学習課内）

TEL:024-521-7404　FAX:024-521-5677
ホームページ　https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11055b/
電子メール　f-kataribe@pref.fukushima.lg.jp

令和５年度震災語り部派遣者　（五十音順）

No. 1

青木淑子（あおき よしこ） 富岡町3･11を語る会

富岡町在住。1970年から福島県内の県立高校で国語科教員として教鞭をとり、2008年に富岡高校校長で退職。震災時は郡山市で被災。富岡町が郡山市の「ビッグパレット」に避難してきたことをきっかけに、被災者を支援する富岡町社会福祉協議会「おだがいさまセンター」のアドバイザーとなる。2015年には「富岡町３・11を語る会」を設立。2017年から富岡町に居住し、語り人（べ）活動に取り組む。震災講話では、原子力災害によって失われたものはなにか？復興のために必要なことはなにか？を一緒に考えていこうと、震災を自分事化するきっかけを提示いたします。

No. 2

石川弘子（いしかわ ひろこ） いわき語り部の会

いわき市久之浜町在住。1981年からいわき市内の水泳インストラクターに従事。震災の半年後、久之浜一小のグランド内に設置された「浜風商店街」の情報スペースに自身が撮影した３月11日・12日の写真を展示したことがきっかけとなり、震災語り部活動を始める。その後、いわき市での「スタディーツアー」の一員となり、現在語り部12年目を迎える。震災講話では、津波の動画、３月11日・12日の記録した映像、復興していく久之浜の様子、及び「災害にあった時はどのように行動したらよいか」または「避難する時の注意点」など、小中高生、一般の方にも防災クイズでわかりやすく説明します。

No. 3

井島順子（いじま じゅんこ） 相馬市観光協会

相馬市在住。震災当時は小高小学校PTA会長を務めており、学校再開とPTA活動復活に取り組むとともに、避難所では寺子屋を運営。2011年冬から2022年冬までは、戻ってきた子供たちの居場所づくりと学習支援のため、大学生を先生役とした「小高フリースペース」を設置。2012年３月より福島県復興支援員１期生、その後相馬市復興支援員等、地元の方々と地域発展に向けて活動を続けている。震災講話では、東日本大震災を忘れることなく、災害に立ち向かう勇気、前向きに戦っていく強さ、互いを思いやる心を持ち続けること、故郷を愛する気持ちを伝えます。合言葉は“ピンチをチャンスに”。当たり前の毎日を大切に日々を楽しく有意義に過ごしていきましょう！

No. 4

岩橋光善（いわはし みつよし） 南相馬市観光ボランティアガイド

南相馬市原町区在住。震災時は双葉町にあった勤務先で被災し、帰宅途中に大津波に遭遇したが奇跡的に津波から免れる。2011年、新地町の「応急危険度判定」、「南相馬市復興市民会議」に従事。2014年から南相馬市観光ボランティアガイドとして観光客等に被災地をガイドし南相馬市の現状と復興について解説、2018年には応急手当普及員と防災士の資格を取得し地域の安全を目指した活動等、現在もこれらの活動を継続している。震災講話では、「原子力災害による理不尽さ」「私たちの経験した悲惨な出来事を二度と起こさない」ことを自分事としてお話しします。

No. 5

大河内喜男（おおこうち よしお） いわき語り部の会

いわき市薄磯在住。2009年に日産自動車株式会社を定年退職。2011年に発生した東日本大震災による津波で自宅を喪失。避難所、借り上げ住宅、災害公営住宅と移り住む中で、５年間にわたって自治会長を経験。同時に支援団体、ボランティア団体等へ震災時の話をする活動を行う。2014年に「いわき語り部の会」に入会し、震災語り部として活動中。震災講話では、「震災当日の行動と教訓」、「防災とは、災害への備え命を守る行動とは」を中心に、自身の経験をもとにお話しします。

No. 6

大谷慶一（おおたに けいいち） いわき語り部の会

いわき市薄磯在住。約40年のサラリーマン人生を61歳の定年で迎えた２年目の2011年３月に東日本大震災に遭遇。津波被害に遭ったが、九死に一生を得る。2012年、いわき市で実施したスタディーツアー事業「語り部養成講座」に参加。同年、「いわき語り部の会」を結成して現在に至る。自分の体験を減災防災のためにどう活かせるのか？特に強く想い願うのは、「厄災から自分の命を守る」こと！「逃げるスイッチ」をどうやったら押せるのか？日常生活の中で、その事態をシミュレーションするイメージトレーニングをおすすめしています。震災講話では、一人一人が災害のことを「自分ごと」として想像して考えることの大切さについてお話しします。

No. 7

岡洋子（おか ようこ） 浪江まち物語つたえ隊

福島市在住。2011年東日本大震災・原発事故により当時住んでいた浪江町から福島市に避難。2014年に「浪江まち物語つたえ隊」に加入、紙芝居を始める。2018年に浪江町の自宅倉庫をリフォームし『OCAFE』を作る。そこでは紙芝居上演、コンサート、草木染め、オカフェ農園作りなど開催。2019年に浪江町の自宅を解体。翌年『草木染めnamiro』を立ち上げる。震災講話では、記録として残している「薄れていく東日本大震災・原発事故の記憶」の紙芝居を通して、浪江町での体験談をお話しします。

No. 8

庄子ヤウ子（しょうじ ようこ）會空（あいくう）

会津若松市在住。2011年の東日本大震災・原発事故により大熊町から会津若松市に避難。翌年２月に会津木綿工房「會空」を創立しオリジナルくまのぬいぐるみ「あいくー」を考案し製造販売を行っている。2014年にふくしま観光復興支援センター主催の「語り部育成」研修会に参加し、語り部活動を始める。震災講話では、地震、津波に加えて原発事故により、他に類を見ない全町民が長期間避難生活をせざるを得なかった経緯と現状、原発事故被災の町としての現実と未来をお話しします。

No. 9

髙村美春（たかむら みはる） 原発震災を語り継ぐ会

南相馬市原町区在住。2011年の震災時は市内の老人ホーム職員として勤務。家族と共に避難するか仕事に戻るかを悩みながら避難を繰り返していたが、2012年にチェルノブイリ原発を訪ねたことをきっかけに、南相馬で生活することを決意する。同年６月にはブラジルのリオデジャネイロで行われた「RIO＋20」や環境省主催の「原子力被災者等との健康についてのコミュニケーションにかかる有識者懇談会」に市民代表委員として参加。同時期に福島の現状を訴える活動として「原発震災を語り継ぐ会」を立ち上げる。震災講話では、震災時に体験した事柄や避難に伴う記憶、現在の被災地の状況や放射線についてお話しします。

No. 10

橘秀人（たちばな ひでと） おおくま町物語伝承の会

大熊町在住。1980年、転勤により大熊町に移住。震災時は川崎市に単身赴任中で、妻の安否確認の為、大熊町の自宅に向かうも福島第一原子力発電所の事故により大熊町に立ち入ることができず、水戸市付近から引き返すといった経験をもつ。2012年の定年退職後、会津若松市で避難生活を送っていたが、2015年の「東京７DAYS・大熊の日」で紙芝居と日本舞踊を組み合わせた「絵おと芝居」を上演した事を契機に上演活動を開始した。2017年に、「おおくま町物語伝承の会」を設立し活動を継続している。震災講話では、主に震災前の大熊町の様子、震災時の状況、避難の状況、復興への課題、未来に向けた展望などをお話します。

No. 11

橘弘美（たちばな ひろみ） おおくま町物語伝承の会

会津若松市在住。1980年に夫の転勤に伴い大熊町に移住。2006年から大熊町の自宅で日本舞踊の教室を始める。2011年３月、大熊町の自宅で東日本大震災で被災し、一時鎌倉市に避難したが、震災の翌年、夫の定年退職を機に会津若松市に避難転居。2017年に夫が設立した「おおくま町物語伝承の会」に入会し活動中。震災講話では、避難先を転々とした合計７回の避難生活の中で、大変だったこと、失ったもの、逆に得たもの、感謝の心、命を大事にすることなど、当事者（女性・主婦）の目線でお話します。

No. 12

宗像涼（むなかた りょう） 富岡町3･11を語る会

富岡町在住。震災時は富岡町第二小学校６年生で、震災後は、川内村、田村市、郡山市で３ヶ月間の避難所生活を強いられ、中学校、高校、専門学校までの８年間、郡山市で避難生活を送った。2019年の20歳の時に親と富岡町へ帰還し、「NPO法人富岡町３・11を語る会」へ就職。現在、語り人（べ）の活動として町内視察や講演を行っている。震災講話では、自身の体験談を含め、原子力災害がもたらした影響、復興に向けて何ができるか、また、震災の記憶がない世代に伝えていくために、災害をどう自分事にできるかについてお話しします。